



ぷらっとシネマ
ディストピアでの、かすかな希望？『PLAN75』
(早川千絵監督)

メタデータ	言語: ja 出版者: 働く女性の人権センター いこ☆る編集局 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000435



ディストピアでの、かすかな希望？ 『PLAN 75』（早川千絵監督）

ミチ、78歳。夫はすでに亡くなり、団地でひとり住まいだ。ホテルの客室清掃員として働く。つましい暮らしだが、同世代の職場仲間との楽しい時間もある。そんな暮らしが急な失業と団地立ち退き問題のせいで一気に危うくなると、PLAN 75の広報が聞こえてくる。

PLAN 75は75歳以上の者に自分の死期を決める選択権を認める制度で、少子高齢化が極まった社会の問題解決策として施行が始まった。

ヒロムはその申請窓口で働く。穏やかにそつなく申請者に対応するうちに、偶然叔父ユキオの申請を知る。疎遠だった叔父だが、申請に至った彼の人生にヒロムは関心をもつ。

申請者は途中で翻意することもできるとされているものの、それをさせないのが職員の職務だ。それでもミチは「眠る薬」をもらう段になって翻意する。ヒロムはあることをきっかけに、もう穏やかにそつなく職務をこなしていられないと思うようになる。後戻りできないはずの段階で彼らはそれぞれに思いきった行動に出る。

早川千絵の初監督作品である本作は、カンヌ国際映画祭で好評価を得た話題作だ。近未来のディストピア（ユートピアの逆）の恐怖を描きながら、その恐怖がSF的非現実でなく、日本社会の現在から遠くないことを考えさせる。描かれているのは「選択」の美名のもとに高齢者に死を迫る恐怖の制度である。現に多くの高齢者の生活レベルは、低年金とお粗末な社会保障・医療制度のせいで先進工業国のなかでも低いほうだ。それは少子高齢化の結果なのだとツケを高齢者に回す論理は、すでに聞かされて久しい。PLAN 75はフィクションだが、現実的でもある。

海外新聞に掲載の映画評の多くが、すでにいくつもの国で施行の「安楽死」制度に言及している。新しいところでは2016年にカナダが法制化した「死のための医療的介助（MAiDと略記）」制度がある。重篤な疾病をもって生存し続けるよりも死を選ぶ者には医師、看護師から死に至る医療的介助を受けられる。つまりこれは「医療」として行なわれる。そもそもカナダは国民健康保険が整っていて患者の医療費負担はゼロだから、MAiD利用も無料だ。施行から1年で約2000人が利用したという。現行法は、MAiD利用条件となる疾病・

障害に精神疾患を含まないが、2023年には含むと改正の予定だ。

カナダだけではない。なんらかの「安楽死」制度をもつ国はオーストリア、ベルギー、オランダ、イタリア、ルクセンブルグ、スペイン、スイス、コロンビア、オーストラリア等々。このうちでスイスの自死補助制度は海外の外国人にも利用が可能で、仲介する団体も活動している。すでに日本からも申請・利用実績がある。

「安楽死」を合法とする国の多くは福祉先進国だ。この世には計り知れない苦しみもあるだろうと思うと、生き続けることをやめる選択を全面的に否定することはしにくい。それを選択した者への公的支援もあってよいだろう。しかしその前提には、「生存の選択」が万全に保証されているならという条件がつく。現実には福祉先進国といえども、その条件を満たしている国はない。だからこそその「死の選択」制度、ということになる。

また第三世界には水や食料が十分でなく、下痢止めやガーゼすら入手困難で、平均余命が40年前後と短い国もある。つまり「生存の選択」の保証は万全でないばかりか、容易でも平等でもないのが世界の現実である。選択の余地なくただ死ぬしかない者も、選択して死にゆく者もいる現今世界が、すでにディストピアだ。私たちの現在は、近未来のディストピアPLAN 75と地続きである。

PLAN 75は申請者に求める条件が年齢である点が「安楽死」制度とは違う。本作ではわかりにくいのが、PLAN 75は単なる高齢者減らし策ではない。若者も同じルールに乗っていて、いずれ死の選択を迫られる。そんな社会で子どもが生まれやすくなるのだろうか。60歳以上の自殺率が世界9位の日本で、自殺率を低くする社会づくりは、PLAN 75実施の社会でも意味あるとみとされるだろうか。

早川が希望を見ているのは、最後の最後にミチとヒロムがする制度のルールから降りてディストピアから遁走する決断だろう。しかし彼らは例外的な少数者であり、かすかで頼りない希望でしかない。それでも少数者による遁走がくりかえされれば、いつの日かディストピアの崩壊につながるものだろうか。（日本、フランス、フィリピン、カタール、2022年、112分）